



創造 トークス

2023.11.7 (火)

に

「コミュニティ」を考えた



ARTS COUNCIL SHIZUOKA

創造 トークス

はじめに

アーツカウンシルしずおかは、社会の様々な分野において創造的な取組が展開される未来を見据え、アートとの関与を推進していますが、各分野にはすでに現場ならではの状況把握を元にした魅力的な取組が存在します。そして、それらの背景には、一歩踏み込まないと見えない分野ごとの課題や視点や知見の集積があります。そうした集積に触れ、アートとの接点を探るために、多分野の事柄をテーマとしたセミナーシリーズ「創造トークス」を開催しました。

セミナーでは、テーマに関わる分野の専門家から現状や背景などをお聞きすると共に、アートの観点も持ちながら取組を実践しているゲストが登壇し、視点を変えることによって新たなアプローチを見出している事例の紹介もしていただいています。

「創造トークス」は、各分野で活躍される方々の創造性がより活性化され、新たな発想がひらかれるきっかけとなることを狙いとしていますが、同時に、その分野に普段関わっていない方々にとっても、社会の動向について新たな知見を得る学びの機会となれば幸いです。

セミナー

4～20 ページ

パネルトーク

21～24 ページ

創造 トークス

コミュニティを考えた



社会でのアートを活用した取組の促進につなげるため、アーツカウンシルしずおかは社会の様々な要素とアートの関係を探るトークシリーズを実施しています。第2回は、地域コミュニティをテーマとして開催しました。

核家族化、働き方の変化、生活様式の多様化、人口減少と少子高齢化、職住分離などが要因とされ、コミュニティの希薄化が社会的に課題視されるようになって随分と経ちます。その間には、東日本大震災や新型コロナウイルスをはじめ、各地で大きな災害が起こり、コミュニティへの関心はさらに高まりました。また、社会変化の影響が大きく、日常生活の中でそれまで機能していた仕組みが変化を余儀なくされるなど、単純に“昔はよかった”と言っているだけではどうにもならない状況になってきています。そんな中、まちづくりはもちろん、学校教育、生涯学習、医療・福祉、スポーツ・文化と様々な文脈の中で、工夫を凝らした地域や暮らしを守る取組が実践されています。この回では、更に進んだ生活様式や社会の変化も踏まえ、これからのコミュニティを考える上でのポイントについて、各地、各分野の実践例を交えてゲストのみさんから聞きし、コミュニティ政策の現在地を探りました。

セミナー コミュニティを創造する ～どうする？どうなる？コミュニティのニュースタイル～

[日時] 2023 年 11 月 7 日(火)

18:00 ～ 20:00

[会場] 妙祥寺(富士市中央町 1-9-58)

[入場料] 無料

[来場者数] 68 名

[主催] アーツカウンシルしずおか

[後援] 富士市・富士商工会議所、
静岡新聞社・静岡放送

基調講演

「ちいさなしあわせを重ね合うふるさと」をつくる：誰もが当事者となるまちづくり

牧野 篤／東京大学大学院教育学研究科教授

事例紹介

① 私設私営の公民館、「ちまた公民館」から考えるコミュニティとまちづくり

久保田 瑛／NPO 法人クリエイティブサポートレッツ職員

② 実践から学ぶ！みんな笑顔のまちづくり

野嶋 京登／富塚協働センター職員

③ 地域の創造拠点として ～コミュニティをひらく・つなげる～

宮城 潤／那覇市若狭公民館 館長

登壇者



牧野 篤

Makino Atsushi

東京大学大学院
教育学研究科教授

愛知県出身。名古屋大学大学院修了。博士(教育学)。専門はもともと中国近代教育思想、今はそれに加えて社会教育・生涯学習を担当。日本のまちづくりや高齢化と過疎化問題、中国・台湾のコミュニティ教育・少子高齢化問題などに関心がある。最近では、自治体と一緒に公民館や生涯学習の共同調査を行ったり、多世代交流型コミュニティの構築を進めたり、さらには企業と一緒に「ものづくりの社会化」プログラムなどを運営している。ざわざわとした雑踏のような研究室で、学生・院生ともども、がやがやと調査に出かけています。



宮城 潤

Miyagi Jun

那覇市若狭公民館
館長

1972 年沖縄生まれ(復帰っ子)。2001 年 NPO 法人前島アートセンター設立に参画、初代理事長。まちの中のアート展『wanakio』などを企画運営。2006 年からは那覇市若狭公民館勤務。運営体制移行により四度の職名変更を経て現在は指定管理者として館長を務める。文部科学省「第 70 回優良公民館表彰」で最優秀館に選ばれたほか、全国公民館連合会が主催する各コンクールにおいて、最高賞 7 回を含む 12 回の上位入賞を果たす。2022 年度「国際交流基金地球市民賞」を受賞。第 10・11 期文科省中央教育審議会生涯学習分科会臨時委員を務めた。



野嶋 京登

Nojima Kyoto

富塚協働センター
職員

地域住民とともに浜松版パーラー公民館「あおぞら協働センター」を開催し、幅広い世代間交流の提供や顔の見える関係づくりの一翼を担っている。ごみ拾いボランティアの活動に感銘し、ごみ・環境・SDGs を考える「ごみゼロフェスタ」を初めて開催した。若者の地域づくりへの参画は、地域活性化のため重要と考え、若者ボランティア「コミュニティ・アシスタント」制度を確立し、イベントの協力や「アオハル音楽祭」などを行った。浜松ケーブルテレビに多数出演し、全国の公民館職員等の推薦のもとに「地方公務員アワード 2023」を受賞した。



久保田 瑛

Kubota Aki

NPO 法人クリエイティブ
サポートレッツ職員

事業担当者として、2020 年から福祉とまちづくりの担い手、約 30 団体が連携し対話を重ねる「浜松ちまた会議」を立ち上げ、生活や暮らしに根ざした浜松中心部のまちづくりを目指し活動中。「浜松ちまた会議」事業は経済誌『Fobes Japan』にも地方の新しい動きとして掲載される。2022 年には浜松中心市街地に私設私営の公民館「ちまた公民館」を開所し、障害の有無や年齢に関わらず誰もが利用できる拠点を運営。さらに 2023 年度は「ちまた公民館」を拡張する「出張ちまた公民館 in 渋谷ヒカリエ」などを実施。新しいコミュニティやまちづくりのあり方を模索している。

進行

北本麻理 Kitamoto Mari

アーツカウンシルしずおかプログラム・ディレクター

基調講演

「ちいさなしあわせを重ね合うふるさと」をつくる
：誰もが当事者となるまちづくり

牧野 篤 | 東京大学大学院教育学研究科教授



みなさん、こんばんは。まちづくり、公民館、それからアートを重ねて最初の基調講演ということで、「ちいさなしあわせを重ね合うふるさとをつくる」というタイトルにさせていただきました。誰でもが主役になれる、当事者になってまちをつくっていくという話ができればと思っています。大きな方向性としては、働き方や生活そのものにも影響するような、人と人との関わりをつくるまちづくりは、行政が主導するまちづくりや、大量生産、大量消費を基本にする工業社会のまちづくりとは違ったまちの在り方をつくるのではないかと、ということです。

「ウェルビーイング」という言葉がいろいろな場面に出てくるようになり、最近では経済系の文書の中にも出てきますが、これをどう訳すかという問題があります。一般的には＜幸せを感じるような状態である＞、＜幸せでいられるような状態になる＞と言われますが、＜より良く生きる＞とも訳されます。しかし、そこには＜より良く生きられる私でなければいけないのか＞、＜強い私でなくてはいけないのか＞といった抵抗感も生まれます。では、「ビーイング」は＜いる＞ということなので、＜そこにいる＞だけではいけないのかと考えると、今度は「ウェル」が気になって、結局＜より良くいられる私をつくる＞という先程の議論に戻ってしまいます。

このことを考える時には、＜私＞が自分一人の力だけでそこにいると思ってしまうことを改めて問う必要があります。一見すると自分の力でそこにいるように見えても、周りの

支えあってこそということもよくあります。それも含めて、ウェルビーイングとは何なのかと突き詰めていくと、＜自分の幸せを感じられるような環境があり、そして、他の人の幸せを感じられるような状態がある＞という考えに至ります。ちょっと難しい言い方になりますが、強い個人がそこにいると捉えるよりは、お互いの関係の中で、そこに自分がいてもいいと思え、そして幸せだと思えるような環境が大事ではないかということなのです。

白黒はっきりわけないで我慢できる力
：ネガティブケイパビリティ

そこで関係してくるのが、「ネガティブケイパビリティ」です。これは、少しずつぐずぐずしていられる能力や、宙ぶらりんに耐えられる力と言われますが、白黒はっきり分けないでしばらく我慢できる力です。あっちかもしれない、こっちかもしれないとしているうちに、いろいろな解決策が見えたり、おのずと道が見えてきたりする、という意味合いで、経済界で使われ出している言葉です。

買い物難民に関するある会議にいい例があります。高齢化と人口減少が進む中で買い物難民がたくさんいる。デジタルを使ってこの課題を解決しなさいというお題が出ると、80歳以上でスマホを持っている方は2割しかいないにもかかわらず、スマホ用

の買い物アプリを開発するというアイデアが多く出てきます。しかし、問題はそこにはないのです。皆さんは、買い物難民で餓死をされた方の報道を耳にされたことありますでしょうか。私は知らないです。孤立死、孤独死はありますが、買い物難民で死んだ方を私は知りません。

買い物難民は買い物ができない人だと言われますが、買い物に行きにくくなってしまったり、家から出るのがおっくうな人もいたりします。そういう人たちは、自分の子どもや友達に頼んで買ってきてもらっていたりするわけです。そういう人たちがスマホからアプリで頼めるようになったら何が起るか。もう明かですよね。買い物に全く行かなくなります。家から出なくなってしまうので、人間関係がどんどん希薄になり、家の中に引きこもった状態になってしまいます。そうすると体が弱っていき、転倒しやすくなったり、認知症が進んだりします。税金の負担を減らすために議論をしているのに、早くから介護や医療が必要になり、逆にお金がかかるようになってしまうわけです。

直球で、“買い物できない？じゃあ、買えるようにすればいいだろう”とやると、実は社会が壊れていってしまう。従来の私たちが考えるような論理の合理性と、日常生活の合理性は違うんですね。だから、うまく両者をすり合わせてやらないと社会は変わっていきません。そういうことが今求められているのだと思います。

再現性を求める工業社会的な合理性からの変化

私たちは再現性を基本に社会をつくってきました。誰がやっても同じように作れる、同じ製品が何万個も何十万個もできる、ということから社会の豊かさをつくってきたわけです。同じ順序をたどれば誰もが同じ結果になるという工業社会の合理性です。しかし、1回きりのことが続いて起こるということがあります。ちょっとおもしろそうやってみたら、思いもよらないことが起こって、ころころ転がって、いろいろなつながりができあがっていくということ。例えば＜一緒に買い物に行く＞という関係をつくって、買い物を楽しめるような状態が生まれることによって、その方々の生活満足度も、健康

度も上がっていく。そうなれば、当然お金がかからなくなり、社会にとってもいいことだというようなことがどんどん連鎖していく。そうしたことが今求められてきています。

そこでは、友達と仲良く買い物に行きたいとか、誰か誘ってくれないかと思っているといった個人の感情も含め、いろいろなものが渦巻いた状態なので、今までは排除されていた雑談みたいなことが大事になってきます。

これまでの再現性によってつくられる合理性に対して、一回性がうまく転がって、みんながつながったり、社会が動いていったりするという時代に入ってきたと言えます。それは言い方を変えれば、誰も否定せず受け止め、試行錯誤を繰り返すようなあり方で、それを楽しめる社会になることが求められているのだと思います。

一回性が転がる合理性と、互いに支え合う社会

私たちが岐阜県でやっていた学校と地域の関係づくりの中で、さきほどの話に関わることがありました。コロナ初期のマスクが足りなかった時、地域に住む高齢の方々



と関係ができていた子どもたちが布マスクを縫って届けたのです。受け取った方々は感激して、地域の仲間に声掛けをして、自分たちも布マスクを縫って、生徒1人につき3枚のマスクを学校に送ってくれました。

“なんでこういうこと思い付いたの？”と子どもたちに聞いたら、“良くしてくれたおじいちゃん、おばあちゃんがひとり暮らしで、今は孤立して困っているんじゃないかと思った”と言うのです。テレビで布マスクの作り方をやっていて、お母さんに相談したら“ミシンの使い方教えてあげるから縫ってみたら”と言われ、練習したということです。それで、友達にも声をかけて一緒に作った。作っている時は、受け取ってくれて喜んでくれるおじいちゃんおばあちゃんの顔が浮かんできてうれしかったし、渡した時も喜んでくれてうれしかった、と言っていました。

さらに、受け取った高齢の方々も同じようなことを言っています。“どうでしたか”と聞いたら、“作っている最中にあの子の顔が浮かんできてうれしかった。渡したら喜んでもらえた。しかも、それができる自分があることがまたうれしかった”とおっしゃるのです。それは、相手の身になって考えることができ、人にとっていいことをとっさに思い付けて、やってあげられる。そうすることで、みんなよい関係になっていけるし、自分もうれしいということなんですね。これを日本語で「恩送り」と言ったりします。相手にとって良いことをやろうとする力は誰でも持っているのだということも、このコロナ禍で見えたのではないかと思います。

仲のいい友達との食事習慣は、死亡リスク軽減につながる

また、私たちは日常生活の足元をちゃんと見ておかなければいけない時代に入ったと言えます。これまで、社会の変革は一生に1回あるかないかぐらいのものでした。しかし、これから人工知能が普及していくと10年に1回社会構造が変化し、例えば、失業が何度も繰り返されるかもしれないと言われ始めています。そんな中で、人間は孤立して生きることはできないという見解が多く示されており、それは、お互いに助け合い、

支え合って生きていくことを考えなければいけない社会になったと言えます。

関わりが大事な社会になってきたということですが、人にとって関係が大事だと言っている調査があるので紹介します。ご飯の食べ方と死亡リスクの関係を調べたもので、家族と同居して一緒にご飯を食べている方の死亡リスクを1として、状況に応じた変化をみるという研究です。

ひとり暮らしで、ひとりでご飯食べているとリスクが高まるということで、男女ともに高くなっていますが、特に男性だけのリスクが高くなっているところがあります。それは、家族と一緒に生活をしているのに、ひとりでご飯を食べている方です。その方の死亡リスクは、ほぼ1.5倍になります。これに対して、仲のいい友達とご飯食べている方は、ひとり暮らしでも男女ともに死亡リスクが下がっています。ご飯の食べ方というのは、家庭内の問題である一方で、社会的な人間関係のつくり方の問題でもあることが分かってきており、ひとりでご飯を寂しく食わず、友達と仲良く食べたほうが長生きになりますという結果なんですね。

さらに、ボランティア活動をするとメンタルヘルスにとってもいいことがわかってきています。誰かのために一生懸命になると、自分の健康度も上がるということです。また、子どもたちは大人と一緒にいろいろな活動をする、自分が所属をしている集団に対して愛着を持つようになり、さらに地域社会や国に誇りを持つようになるということも、いろいろな研究からわかってきています。

幸福感を決める要素の変化

社会が変わってきている中で、国の機関が幸福感を決めているものについて研究しています。それによると、ひとつはいい健康状態であることが幸せにつながるとされています。もうひとつは良い人間関係があることです。そして、3つ目が変わってきています。これまでは、年収や学歴が高いことでした。例えば、私がいる大学なんかに入ることが人生の目的だったようなことがあるわけです。しかし、今では学歴は幸福

感とほとんど関係ないことがわかってきており、年収も関係がなくなりつつあるとも言われています。

では何が大事かというと、自分で自分のことが決められたり、自分の価値を尊重してくれる関係を持ったりすることだと言うのです。みんなが同じように同じ物を持つことではなく、それぞれ違っているということを受け止め合って、一緒に生きようという関係をつくれることが幸せにつながる、と。そのくらい関わりが大事になってきています。

大人との1対1の語り合い通じて子どもを育む自治体

島根県の益田市では、子どもを育てることに一生懸命になることでまち全体を活性化させています。大人と中高生、中高生と小学生が1対1で語り合う会を行っています。8年ほど前に始まって、人口44,000人に対して、すでに8,000人以上の人が語り合った経験を持っています。この取組を通じて、子どもたちは地元の大人の魅力を発見し



＜自分たちのふるさととはここだ＞と言い始めます。市内に大学がないので、高校卒業で9割が出ていき、今までは帰ってこなかったのですが、今は7割の子が“帰りたい”と考えるようになり、実際に帰ってきた子たちもいます。

こうして「ふるさと」ができあがっていくのですが、その時に、私たちは「ふるさと」って一体何なのかに気を付けなければいけません。私たちは、「ふるさと」とは、歴史や文化や風景などと言いますが、それだけを子どもたちに教えても、彼らは「自分には関係ない」と言います。けれども、大人といい関係があったり、友達といい関係があったりすると、その関係の中に風景や歴史や文化が入ってくるようになるので、自分事になるんですね。それがないまま教え込んでも他人事なのです。そこを、私たちは見落としてきたのだらうと思います。

また、益田市では、子どもたちが地域活動チームを作って提案をし、それを大人が受け止めて、“あの人ならこういうことできるよ”と紹介をしたりしながら、みんなで一緒になってまちをつくっていくという動きが出始めています。大人から認められながら自分たちで新しいものをつくるという子どもたちの活動ですが、そこからとても自己肯定感が高く、しっかりと意見を言う子どもたちが生まれてきています。相手の幸せを感じながら、自分も幸せになり、いいことをやっていこうという流れがあり、そうしたことが起こり続けるまちができていっているのだらうと思います。

いい関係の中で思わぬ自分が育ってくる

私たちは、これを「AARの代謝」と言っています。OECDが言い始めた「AAR循環」を元に、組み替えて使っています。

はじめの「A」は、予期するという意味のAnticipationの頭文字で、いいことが起こりそうだなと思ってわくわくしちゃう感覚を伴います。そうすると、もう体が動いちゃって、例えばマスクと一緒に作る動きになる(Action)。そして、これで良かったかなとか、ちょっと改良しようかなとふりかえる(Reflection)。うまくいったり、喜んでもらえた

りしたら、「今度はこれやろう、あれやろう」と頭が働いて、どんどん新しいことが起こるようになっていきますね。

その例として、横浜市の町内会に参加した子どもたちの例があります。中学生の女の子が町内会の役員をやっているのです。2年前に立候補して、今は会長をしているということですが、それによって友達も立候補し始めて、この町内会では役員のうち4人を中高生が務めているということです。そういうことができる社会になってきたのです。子どもたちは、“大人が楽しそうだからやってみたかった”って言うのです。

今までは、幸せて何かっていうと、物が豊かになることだ、教育が高まることだ、そして精神的に高まっていて、最後は自己実現ができることだと個人をベースに言われてきました。それは周りにいい環境をつくってもらえたからできたという面もあります。そう考えると、子どもたちだって大人たちがちゃんと支えてくれれば力を発揮できると言えるわけです。自分が発達すると思っているけれど、本当はいい関係の中にうまくはめられると、周りによって自分の力が引き出されて、思わぬ自分ができあがってくる。それがまたおもしろくなって、もっとやってみたくなる。そういう代謝が起こるのではないか、ということなんですね。

それは、もしかしたら、皆さんが日常生活ですでにやってらっしゃることかもしれない。例えば、世間話が終わらなくなってしまうのは、みんながあれこれ言ってくれることで、いろいろなことを思い付いて、おもしろくなるからですね。それを、私たちは「はまる」と言っていますが、ジグソーパズルみたいにはまって、互いに力を引き出し合っているような状態です。そうやって巻き込まれていくので、みんながお互いに巻き込み合い、能力を引き出し合いながら、新しいまちをつくることにつながるのではないかと。誰もが当事者になっていくし、恩送りを続けていくことにつながるのだろう、ということなのです。

そんなことが、実はアートともつながってくるのではないかと思います。特に、現代アートは、人の思い込みを壊すことから始まって、新しいものを生み出すことにつながっていく、とてもダイナミックなものなのです。それと、私たちが言っていることは実は重なっているのではないかと思います。今までのしがらみの中で生きていくのか、お祭りを残していこうとするためには、実はその中身を変えてかなきゃいけないのかもしれない。そこにはダイナミックに変わっていくという面白さがあるのではないかと思います。伝統というのは、実は新しい伝統に変わっていく、そんなことがあるんじゃないかと思います。



事例紹介①

「実践から学ぶ！みんな笑顔のまちづくり」

野嶋 京登 | 富塚協働センター主任



みなさん、こんばんは。今日は、すごい熱意を持ってお見えになられた方、それから、ちょっとどんな話があるのかな、聞いてみたいなと思ってお越しいただいた方、さまざまいらっしゃると思います。まちづくりに対して、いろいろな思いや考えの方がいらっしゃる中で、みなさんの考えがいろいろあって一緒になってやっていくということが、まずニュースタイルとして重要なんじゃないかと思っています。〈ついてこいよ!〉とい



うスタイルではなくて、多種多様な方が集まって、全体として底上げみたいな形でまちづくりを進めていけたらと思っています。特に、最近は共生社会と言われますし、子どもから高齢者、あるいは障害者、外国籍の方、LGBTの方、そういう方々のいろいろな意見を吸い上げて新しいコミュニティをつくっていくのが重要じゃないかなと思っています。

また、昔はご近所の顔が分かっていて、しょうゆやみそを借り合えた時代ですが、今では〈あれ?〉って思う方も多いかもかもしれませんよね。やっぱり現代的なお付き合いというものが必要なかと思っています。程よい距離感で、お互いに何か困ったことがあれば助け合えるという関係づくりが求められる時代に入っていくのかなと思っています。

地域づくりの4ステップ

今日は、「実践から学ぶ！みんな笑顔のまちづくり」というタイトルでお話させていただきます。公民館の職員の役割は何だとはよく聞かれます。昔から公民館の機能は、“つどう・まなぶ・むすぶ”とよく言われますが、もうちょっと具体的に言うと、地域課題の解決や、魅力の発信と言われます。私は、みんな笑顔のまちづくりができるように、

そのためにも多くの住民の方と対話をして、信頼関係をつくり、そこから拾っていくことを大切にしています。

私は、楽しい時間をみなさんと共有することを大切にしています。その上で地域づくりをステップ1から4に分けて、こんなふうに考えています。ステップ1としては、何事も最初が肝心で、エリア特性を知っていく。特に、人ですね。人を知ってください。顔の見える関係づくりをしていくことで、徐々に地道に信頼関係ができてきます。

ステップ2は、声や要望や提案を受けて、どういう課題がこの地域にあって、どういう解決方法があるのかを分析します。ステップ3では、それらを形にして実現するということになりますが、地域の住民の方も忙しい方が多く、伴走型の支援をしながら、地域の課題を自分ごととして捉えていただく点を大切にしています。

そして、ステップ4として、相互交流を通してみんなのためにやっていこうという地域の気運を高めることがすごい重要だと思っています。市全体としても底上げができますが、商店街とか、自治会とか、小さな所での活動が大きいつながりになっていくのかなと私は思っています。そして、それは人のつながりも同じで、個別の活動が、あの人だったら何か知っている、あの人だったらこういうことをやってくれるというように線でつながって行って、最後は面でつながっていくような、そんな人間関係づくりが重要だと思っています。

■ 浜松版パーラー公民館

この地域づくりに関するプロセスを踏みながら私がやった実践事例として、浜松版パーラー公民館の「あおぞら協働センター」というものがあります。沖縄で実施されているパーラー公民館という、公園でパラソルを立てるという取組を4年前に研修で伺って、浜松でそれを実践した形です。白いパラソルを立てていると、何やってるんだろうって思うきっかけになると思うんです。その場で知り合った方ともコミュニケーションを取りながら会話していくとおもしろいことが起きる。人が集まると何かが起き

るっていうのを大切にしています。

そこではクリエイティブなワークショップをやっています。公民館でやっている講座は、結論が決まっているんですよね。例えば、紙飛行機作り教室だと、みんな同じプロセスで飛行機を作ります。しかし、この「あおぞら協働センター」でのワークショップでは、いろいろな素材を集めて、それを材料に、それぞれが作ります。クマっぽいものを作る子もいれば、ウサギを作る子もいれば、ネコっぽい作品を作る子もいる。結論がないんですね。だから、それぞれの良さを認め合うという発想が生まれる。そういうようなものをまちづくりにまた生かして

くれたらと思っています。顔の見える関係をつくるために、6月から12月のほぼ毎週土曜日に開催して、毎回50人ぐらいが来ています。そこからのつながりで、アーティスト団体ができ、体育館でのアートイベントを開催したこともあります。

次に、ご紹介するのは佐鳴湖です。私の勤務する富塚町という地域内にある湖で、かつては日本で一番水質が汚い湖だったのですが、今では改善されてきています。しかしゴミ拾いボランティアの方が教えてくれて、見に行くと、湖面がゴミだらけになっていたのです。この方が協働センターに来館して、浜松市も知らなかったことを教えてくれ、ごみ対策に乗り出すようになりました。私自身も周辺の協働センターに呼び



掛けて館内掲示をしたり、ごみゼロフェスタというイベントを開いて、トークセッションや、走りながらゴミを拾うプロギング等を実施したりしました。

それから、「拾ったゴミを洗って作品にできませんか」とアーティストにお願いして、不思議の国のアリスの世界を表現したものを作ってもらいました。2回目になると、若者のボランティアが来てくれたり、アート活動をする中から「車に落書きしていいよ」って言う人まで現れたりしました。今日いらっしゃる方はどちらかというともちづくりに関心が高い方が多いと思いますが、まちづくりに関心が低い人を巻き込むのがポイントです。車を提供してくれた方のような人材と出会えたのも、その例です。

ワクワク、ドキドキと、人のつながり

公民館だとアウトプットとして、講座の参加者数が指標としてよく求められますが、何を学んだか、どう感じたかという行動変容につながることを大事にしています。若者が公民館に来ないということが言われますが、それに対する新しい制度を作ったりします。最初はボランティアだった若者たちに対して、彼らの自己実現をしたいという声を受け、音楽祭やハロウィンのイベントをやったりするようになりました。そこで、彼ら

にモンスターやロゴを作ってもらったりします。彼らにやってもらうことで変化が生まれています。先日開催した会では、地域も協力してきたり、勉強会のコーナーを作ったり、敬老会で渡すクッキーを高校生が小学生に教える講座がはじまったりしていました。

その他にも地域に素晴らしい団体がいたら、それを推薦して表彰してもらったり、公園の利活用に関する思いを叶える場をつくったり、合宿をやったり、古民家と公民館をかけあわせたものをやったり、農業経験の少ない住民と農家が組んで耕作放棄地の対策をしたりと様々な活動があります。

まちづくりするに当たって、ワクワク感やドキドキ感を大切にしてほしいなと思っています。それはイベントでもそうですし、お祭り事でも同じです。そして、何より人のつながりが重要です。〈あの方だったら何かしてくれるだろう〉という、いろいろなつながりをつくっていくことが求められているだろうと思います。

今日はいい研修だったと感じられたとして、その後実際に行動に移す方は、実は少ないですね。まずは思いと一緒にできる方、仲間を見つけて、何か1つ小さなことから行動してみましょう。それが、いずれ生活や地域や社会課題解決の糸口になっていきます。ありがとうございました。



事例紹介②

私設私営の公民館、「ちまた公民館」から考える
コミュニティとまちづくり久保田 ^{あき} 瑛 | NPO 法人クリエイティブサポートレッツ職員

浜松市にある、認定 NPO 法人クリエイティブサポートレッツの久保田瑛（あき）と申します。私たちが民間活動として、なぜまちづくりや公民館運営をやっているのかという話から入っていただければと思います。

NPO 法人クリエイティブサポートレッツは、重度の知的障害がある私の弟の誕生がきっかけで 2000 年に誕生しました。主には、文化事業と福祉事業の 2 つを軸に活動しています。拠点は 3 つあり、そのうち、たけし文化センター連尺町とちまた公民館は、浜松の中心市街地にあります。

問題行動を文化創造の軸から捉え直す

そして、文化事業を代表するのが 2016 年から行っている「表現未満、プロジェクト」というものです。「表現未満、」とは、誰もが持っている自分を表す方法や、本人が大切にしていることを、“取るに足りない”、“どうでもいい”、“これは問題行動だ”と切り捨てないで、その行為こそが文化創造の軸であると考え方の考え方です。

私の弟の久保田壮（たけし）さんは、タッパーに物を入れてたたき続けるといった行為を、3 歳から寝てる以外はずっとやっています。この行為は、社会的には問題行動や迷惑行為といってタッパーを取り上げられてしまうことが多いです。でも、レッツで

は、それが文化創造の軸であるという視点を持って、彼のやりたいことを尊重して一緒に楽しんでアート活動を行っていこうと考えています。

緊急事態宣言下に始まったまちとの関わり

2018 年に日本財団さんの助成を得て、たけし文化センター連尺町という拠点をくれました。ここは、重度の知的障害がある人が通う福祉サービス事業所でありながら、文化センター、音楽スタジオ、シェアハウス、一般の方も使えるゲストハウスといった機能が混在している場所です。クラブイベントをやったり、観光ツアーなども開催しているため、年間約 1 万人以上がこの場所を行き交います。

そして、2019 年から壮さんもヘルパーを使った自立生活を始め、3 階のシェアハウスに住み始めています。彼は浜松のまちの住人になりました。そして、私たちスタッフもこのまちを毎日利用しています。そんな私たちが、本格的にまちに関わり始めたのがコロナ禍です。緊急事態宣言下も施設は運営をしなくてはならないので、毎日まちにいたのですが、衰退していくまちを目の当たりにしました。そして、それは今も完全には回復していません。

そこで私たちは、商業だけではなく、生活や暮らしを軸とした新しいまちの在り方

を模索するために、まちで活動する金融、不動産、NPO、医療といった、業種が異なる約 40 の団体、個人の皆さんと共に「浜松ちまた会議」というプラットフォームを立ち上げ、アートプロジェクトを通じてまちの新しい可能性を提案してきました。例えば、2021 年、2022 年は、浜松中心市街地に 20 年間手付かずで空き地となっている 1,400 坪の松菱百貨店跡地を開放し、障害のあるメンバーを通じて新しいまちの遊び方や居方を見せるということを行い、市民の方からの反響も大きくありました。

さらに今年の 9 月には、地域の人と楽しい経験を通じてつながるということをテーマにお祭りを開催しました。メインになったのは、巨大な張り子をみんなで作るということで、半年前からいろんな地域の方とつながって準備を進め、お祭り当日に DJ 盆踊りやスケートボードパークと共に披露しました。来年はもっとおっきいの作ると盛り上がっています。

出会い直し、関係性をつなぎ直す

そんな中、2022 年 10 月に「ちまた公民館」という事業を立ち上げました。異なる属性の人たちが出会い、物を買ったり、お金を消費したりするだけじゃない場、いい場所をつくりました。ちまたとは、人が交差する場所という意味です。

10 坪しかない建物ですが、銅版画やラジコン、小学生の持ち込み講座など、いろんな講座が行われています。また、もめ事や悩み事相談なども起こりますが、起きたことは全て自治で解決しています。最近は常連メンバーが店番をするといった動きが出ていて、月 1 回開催する縁日もその常連メンバーたちが企画して、9 月に「9 月の本性を突き止めるの会」と称して、小学生がギャル部をやったり、ラジコン部をやったり、謎の会が開催され広がりが見えています。

また、この場所は人が交差する場所であると同時に、人が出会い直す場でもあると感じています。例えば、たっちゃんという愛称の 50 代の男性は、知的障害と身体障害があります。私たちの福祉サービスの利用者ではありませんが、彼は 2 時間近く



かけてバスでちまた公民館にやってきます。初めのうちは店番を支援員だと思い、店番にだけ食事介助などの頼み事をしていました。しかし、ちまた公民館は自治、みんなでつくる場です。彼と対話を何度も重ねました。そうしているうちに、彼はだんだんと店番ではなく、周りの人に頼むようになってきて、今は常連のメンバーが彼の食事介助をしてくれるようになり、彼自身もみんながちぎりやすいようにサンドイッチを持ってくるようになるといった変化が起きています。また、ちまた公民館で開催されている大学のゼミに彼が入ることを先生が OK してくださり、大学生と一緒に哲学書を読んだりして一緒に時間を共有するみたいなことが生まれています。これは支援員と支援される者っていう関係だと絶対できない関係だと思います。このような出会い直しができることがおもしろいと思っています。

安心できる近場の人間関係が支える「ネイバーフッドシティ」

ちまた公民館は、特定の建物に縛られている事業ではなくて、いい場所をいろんな所につくるということをミッションに掲げているので、「出張ちまた公民館」とい

う新しい事業を始めています。

例えば、先ほどお話したお祭り「凸凹まつり」の会場にちまた公民館ブースを作って、常連のメンバーがラジコンを持ち込んだり、ロボを作ってきたり、綿菓子を買ったりしていました。最近は、クリエート浜松という浜松の街中にある複合施設 1 階のふれあい広場を週一で借りています。ここにうちの知的障害があるメンバーにも遊びに来てもらいながら過ごすという実験事業をしています。重度の知的障害があるメンバーは場所の使い方がすごい上手で、みんなできゃーって言いながら走り転げたりとか、台車を使って遊び始めたりします。自習している学生もここにはたくさんいるんですが、その人たちに“なんでここにいるの?”、“何しにここに来てるの?”みたいなことを平気で聞き回ったりするんですね。彼らが、うちの利用者のメンバーやちまた公民館メンバーと出会うことで、なにか違う関係性が生まれているなと思っていますし、ここで出会った人がちまた公民館を訪れてくれるということもだんだん増えてきました。また、クリエート浜松に入る浜松国際交流協会（HICE）さんとのコラボ事業も話が進み、国籍関係なく混ざる場が生まれそうです。

最後に、なぜ私たちの法人はまちと関わるのか、ちまた公民館をつくっているのかという話をお話します。浜松ちまた会議では、「福祉を軸にしたネイバーフッドシティ」とい

う提案をしています。簡単に言うと、自分の生きてる徒歩圏内に安心できる人間関係があって、安心できる生活やインフラが整っているっていう状態をつくらうということです。

自分たちの暮らしや生活を豊かにするのはお金ではないと、コロナ禍や今の危機の時代で十分わかっていると思います。その中で、コミュニティまでもいかなくとも、スタディストの岸野雄一さんの言葉をお借りすると、“連絡網みたいな関係性”が自分の地域や身の回りにあり、困った時に相談したり、ちょっとご飯を食べに行ったりできる、そういう人間関係がまちづくりに必要ではないかと考えています。

その考えを元にしたものがネイバーフッドシティというコンセプトです。そもそも公民館は、そういうところから生まれたアソシエーションというか、自助の仕組みではないかと思ひますし、そういう切実なところからできた仕組みなんじゃないかなと思ひます。そういう中で、公民館という制度は、アートや福祉と連携すればもっとおもしろくなるのではないかと思ひています。私自身も自分の生存戦略のためにやっていると思うのですが、福祉やアートの概念をまちが取り入れて、ちょっとした小さなことから始めて柔かくしていったら、これからの自分たちが生きやすい、自分が生き延びるためのまちがつくっていけるのではないかと思ひています。ありがとうございました。



事例紹介③

「地域の創造拠点として
～コミュニティをひらく・つなげる～」

宮城 潤 | 那覇市若狭公民館館長



はいさい。こんばんは。沖縄県那覇市からやってまいりました、那覇市若狭公民館の館長をやっています宮城といいます。お三方がお話したことで重なる部分も多いかと思いますが、那覇市の若狭公民館で取り組んでいる事例を共有できたらと思います。

なぜ「コミュニティを創造する」というテーマでトークが繰り広げられているのかというと、地域課題が複雑化、深刻化している状況の中で、これまでのコミュニティとは違った新たなつながりや関係性を模索する必要があるということだろうと理解しております。ほんとにいろんな課題が地域の中にありますが、私は課題解決に特効薬はないと思っています。地域住民自身が主体的、継続的に取り組む必要があり、そのために一人一人のやりたいという思いに寄り添って、後押しすることが大事なということです。

日々の暮らしがある中で、課題にずっと向き合い続けることは大変です。課題に向けた良い取組が生まれてきたけれど、2年、3年、5年と経つ間に活動が縮小して、いつの間にかなくなっていたということ、皆さんも経験あると思います。課題はすぐには解決しないので、地道に継続して取り組む必要がありますが、地道に継続的に取り組むのは難しいわけです。だから、活動そのものを魅力的にし、楽しくする。そうした活動じゃないと、なかなか課題って解決しないかなと思います。一方で、楽しいだけだと、活動を消費して終わってしまうので、この両方を見据えて取り組むのが大事

だろうと思っています。

また、課題解決は、ちょっと視点を変えると、価値創造にもつながります。なかなか解決しない課題の解決に向かう時には、何かしら新しい価値を生み出していて、逆に言うと、新しい価値を生み出すことが課題の解決に近づくことではないかということです。

そうした中で取り組んでいる事業をご紹介します。

先ほど野嶋さんの方から出た「パーラー公民館」という取組があります。若狭公民館のエリア内に、自治会加入率が非常に低く、高齢者率が高く、生活困窮家庭が多い曙地区という所があります。その地域から公民館が欲しいという声が出てきて始まったのが、公園にパラソルと黒板テーブルを置いて、公民館だと言い張る「パーラー公民館」です。これは、集う、学ぶ、結ぶという公民館の役割を発揮することで、建物がなくとも公民館と言えるのではないかという試みでもあったわけですが、月に1回ぐらい、アーティストやアート系NPOが開発したワークショップを実施する以外は、公園にパラソルを立て、おしゃべりに来た人たちの話を聞いていました。そのうち、おもしろがっているいろんな人が寄って来るようになり、地域の人たちや様々な機関が協力し、連携が生まれてきました。

他には、外国ルーツの方々とのいろいろな交流事業も行っています。那覇市は、全国



的にも外国人増加率が非常に高い自治体です。その中で一番多いのがネパール人の留学生ですが、6、7年前に急激に増えた時期がありました。その時に地域内に根拠のない不審感みたいなものがあつたことから、お互いが顔を知り、理解できるようにと「ネパールニューイヤーパーティー」を始めました。ビクラム暦の正月、ネパールの正月は4月にあります。ちなみにビクラム暦では、今は2080年です。知っていましたか。知らないですよ。でも知らないけれど、知ると興味、関心が湧いてきますよね。それを入口にして、ネパールの方々が大事にしているお祭りを地域の方が一緒になって運営しています。そうしている中で、地域の祭りにネパールの方々が出店や演舞で参加する等、いろいろな活動が派生しています。

こうありたいという姿から逆算し、プロセスをイメージする

私たちが事業を行う時に意識しているのは、講座やイベントは果たしてゴールかという点です。地域づくり、まちづくりをする時、その先のありたい姿を意識しているはず。若狭公民館では、誰一人取り残さない地域社会の実現ということをテーマに

しています。イベントなどをゴールにしないことによって、その後に起こることをどう想定し、何を期待するかということを考えます。こうありたいと考えた姿から逆算して、誰に関わっていただくか、どういう関わりを生んでいくかということをイメージするので、プロセスが非常に重要になってきます。

評価の定まっていない新しい活動の最初のフォロワーになる

同時に、関わる人たちの「やりたい」とか「なんとかしたい」という思いを大事にしたいと意識しています。それに関連したおもしろい動画があるのでご紹介します。『TED』で紹介されたムーブメント、社会運動の起こり方についての講演です。

音楽フェスの観客の様子が映っています。1人の男が裸で踊り始めましたが、怪しい変な人があるのと、みんな遠巻きに見ていますね。そこに1人のフォロワーが現れて、一緒になって踊り始めます。踊りながら“みんな一緒に踊ろうよ”と手招きをしています。新しい動きは、誰もそれがいいことなのか、どうなのかわからない。評価が定まっていない状態です。だから、みんなきょとんと見ているだけなんですね。でも、そこに1人の男が、おもしろいと価値付けをして、手招きで“これおもしろいよ”と示す。それによって次のフォロワーが現れます。3名は、人の集まりとしては集団となるので、そこからは加速度的に人が関わっていくという様子が見られる動画です。

1人の裸踊りに加わるのはちょっとリスク高いですよ。変な人だと思われるかもしれない。でも、ある程度の集団になってくると、新しい動きを起こしているおもしろい集団となり、みんな関わり始めるんですね。そして臨界点に達すると、わーっと広がっていきます。ムーブメントはこうして起こっていくという話です。プレゼンターは、ムーブメントが起こった時には、最初に踊り始めた人がフィーチャーされて「すごい」と言われるが、実はこの2人目、最初のフォロワーが非常に重要であるという話をしています。私たちの公民館もこういうことを意識しています。

そして、おそらく、アーツカウンシルという機能もこういうものだと思うのです。アー

ティストや、まだ評価が定まってないアート表現などに対して、〈これはおもしろい〉、〈社会的に意義がある〉、〈価値のあるものだ〉ということを示して、理解ができるような形にして、みなさんに広める。そういったことからいろいろな新しい動きが起ってくるのだと思います。

何かに気付いて新しいことを起こす人の活動は、それを誰も見たことがないので評価ができません。価値が定まってない中で、誰かが〈いいよ〉と示すことによって、活動が勝手に広がっていくきっかけをつくることができます。

信頼関係を築くための「広報」と、活動を派生させるための「傾聴」

勝手に広がりが見えることを見据え、広報にも力を入れています。広報は英語でパブリックリレーションズと言いますが、パブリックは「公衆」、リレーションは「関係性」を意味し、信頼関係を築くことだと思っています。地域活動していて反対されることの大半は、“聞いてなかった”、“俺は知らない” みたいなことだったりするので、ちゃんと周知していくことは非常に重要だと捉えています。また、情報発信をすることと併せて、反応として聞こえてくる声にしっかりと耳を傾ける、「傾聴」も大切だと考えています。情報発信をして活動内容が知れ渡ると、“そんなことやってるんだったら、私もこんなことをしたい”、“こんなことできるんだけど、協力して” という人が現れてきます。そうした〈やりたい〉という思いも一緒に受けていくことで、協働した人たちがいろいろな活動を起こすようになります。

＜派生した活動例＞

— 若狭公民館のエリア内に飲み屋街があり、近隣の小、中学校で過半数がひとり親世帯だったり、那覇市内の夜間保育園のほとんどがこのエリア内にあるという状

況の中で、当事者団体と連携してシングルマザー向けの講座を実施している。

— それを知った方から相談が持ち込まれ、無料英会話教室と一緒に立ち上げ、9年くらい活動している。きっかけがあれば学ぶ意欲は持てるという自分の経験と、定時制で掛け持ちアルバイトをしている同級生や、学び直して来ている自分の親と近い世代の同級生の困窮した状況を知った中で、自分のスキルを活かして子どもたちにアプローチしたいという思いが始まり。

— 学生時代にショートムービーフェスティバルに関わったことで視野や関係性が広がったという体験がある若い女性の映画監督から、子どもが審査員をするような子ども映画祭をつくりたいが、独身で子どもと接した経験がないという相談を受け、一緒に子ども国際映画祭を立ち上げた。

— 学習支援を通じ自分たちの学びにもなるようなインターンシッププログラムを開発したいという教員志望の大学生からの提案を受けプログラムを作って一緒に取り組んだ。

— 音楽団体から学費不要の音楽を通じた子どもの居場所づくりをしたいという相談を受け、ジュニアジャズオーケストラを始めた。

— 子どもの頃体験した野外上映会を今の子どもたちに体験させたいという地域出身の若者と野外上映会の実行委員会を立上げ、みんなで手作りの上映会を開催した。

— 南極と中継できるという南極観測隊 OB の方からの提案を受け、一緒になって昭和基地と中継する南極教室を始めた。

—浅草のサンバカーニバルに行ってるミュージシャンのボランティアが、そこで知り合ったブラジルのサンバチームを誘ったら本当に沖縄に来ることになったので、近くの学校でのサンバ体験教室や、公民館での市民講座を企画した。

—本国でたびたび献血をしていたというネパールの留学生が、沖縄に来て初めての誕生日に記念で献血に行き、問診票が日本語で苦労したが、担当者が丁寧に接してくれたおかげで献血することができた。うれしかったので SNS に上げたところ、「私も献血したい」という人たちがどんどん現れ、毎月仲間を募って献血に行くようになり、ネパール献血者協会を立ち上げた。その周年イベントについて相談を受け、問診票の問題に取り組んだりする等、次につなげていこうとしている。

小さなコミュニティと、緩やかなつながり

コロナ禍には、パーラー公民館は地域の方々に完全に運営移行して屋外で集える場をつくり、シングルマザーの人たちは非正規雇用のシングルマザーの支援を行い、防災キャンプをやっている方々は継続して防災活動を行えるようにと一般社団法人を立ち上げました。学校やお店が休みになる状況の中で、学生団体、キャリア教育コーディネーターの人たちは、GIGA スクール構想の前でしたが、オンラインでの学習支援に取組、観光業や飲食業でバイトしている留学生のためにネパール人の当事者団体は食料支援を始めました。そこからいろいろな課題が出てきたので、県のコロナ対策本部につなげ、外国人に対するオンラインコロナセミナーも始めました。

一方で、コロナ禍で課題を抱えたシングルマザーや在住外国人の状況を、従来型の支援コミュニティも自治会も民生委員の方々も把握していませんでした。つながりがないから、気付きづらいのですね。コミュニティは利害を共にする共同体なので、価値観の近似性が高く、安心できる居場所です。その反面、一元的で排他的なアイデンティティになりがちです。つながりが重要だと言うけれど、それがしがらみにもなりやすく、



そこに入りたくないという人たちも多いのだと思うと思います。そうすると、このしがらみの部分をどう薄くしていくかが重要な気がしています。

那覇市の場合、自治会加入率が15%を切っています。地縁コミュニティに入っていない85%の人たちにどうアプローチし、つながりは保ちながらも、いかにしがらみを薄くするかと考える中で、小さいコミュニティを地域の中にたくさんつくり、それらが緩やかにつながっていくということがいいのではと思っています。

思いを持っている人たちを主体としながら、私たちはいろいろな事業を支援してきました。ここで気付いたのは、思いや特性を生かした協働事業で成果を上げることができた人は、エンパワーメントされてもっとやりたい気持ちになり、危機的な状況においても自分たちで活動を起こしていました。これが自治を育むことにつながっているのだと思うと思います。

「アートな部活動」

コミュニティは内向きで、排他的になりがちです。それに対して、外に視点を向け

たコミュニティの在り方を模索しようという取組として、＜アートな部活動＞がありません。

アーティストに関わってもらったダンボール部では、段ボールを水に浸して3枚の紙に分け、その紙でレターセットやノートを作るワークショップをしました。地域の商店から段ボールを集めて商品開発をし、それを地域のイベントなどで売る。その売上を海岸清掃活動などの団体の活動資金にすることを期待したものでした。

また、コロナ禍でコミュニケーションが取りづらい中、オンラインが苦手な人が対面にならなくてもできるコミュニケーションの方法として考えたのが、ポストポスト部です。公民館に設置されたPちゃんというポストに投函された手紙や絵などに対して、部員がおもしろい返答を考えるという活動をしています。例えば、投函された100年前ぐらいのポストカードに対して、実際にその場に行き行って写真を撮ったり、描きかけの絵の続きを描いて、それらを掲示板に掲示したりします。

他にも、アーティストの藤井光さんに協力してもらい、文化背景の異なる外国籍の方々と交流しながらYouTubeに出す映像作品を作るということもしました。視点が変わるので見え方も違い、共に制作したり、完成した作品を鑑賞し合ったりすることでお互いの理解を深めていく様子が見られました。

抜け落ちを想像し、環境をつくる

多様な小さなコミュニティを生むようにしていますが、同時にコミュニティ間の緩やかなつながりも大事にしています。多文化共生の活動をしているNPOと、小中学生を対象とした居場所づくりをしている高校生のグループや、海外から来ているけれどコミュニティがない人たちと三味線サークル、留学を考えている高校生同士であったり様々です。

コミュニティやつながりと言った時に、そこに誰がいて、誰がいないか、無意識的に抜け落としている人がいないかということを、想像力を持って意識し、その上で、そこにいる人たちが自分たちでいろいろなことを起こして動いていくような仕組みを作っていきます。私たちはプログラムを提供するのではなく、環境をつくっていくことを心掛けています。ありがとうございました。



パネルトーク

“ニューススタイルのコミュニティ”の実現に向けて

登壇者 | 牧野 篤、野嶋 京登、久保田 瑛、宮城 潤

聞き手 | 北本 麻理 / アーツカウンシルしずおか プログラム・ディレクター

北本 皆さま、ありがとうございました。これからパネルトークに移ります。まず、宮城さんに、コミュニティの創造にとって、アートの視点や手法を用いることがどう作用しているか。人のことに焦点を当てたお話をもう少し伺いできますでしょうか。

宮城 コミュニティは、特定の人たちのグループで形成され、そこには共通の価値認識があって、共有する体験があったりしますが、その「なんとなくそうだね」という共通の価値観が、実は「そうでなければならない」

という縛る作用もあったりするなと思うんですね。

でも、そもそも一人一人は違うわけですね。その一人一人が違うということに立ち返らせてくれるものがアートだと思っています。あの人はめっちゃめっちゃこの作品いいって言ってるけど、私は全然意味が分かんない、ということあるじゃないですか。それは、それぞれの感覚なんですね。感性によって違う。それぞれが別個の存在であるということを、感性の違いによって改めて確認させてもらう。

だから、コミュニティの共通の価値があるような認識を持っていたとしても、やっぱり一人一人であるということに立ち戻してくれ、それが揺さぶられ、楽しいとか、感動する体験をすることが重要。それぞれがそれぞれでいい。その上で、それぞれの価値観とか存在を認め合えるようになっていく、そういうところで、アートの意義はすごく大きいなと思っています。

北本 ありがとうございます。レッツの久保田さんも「人って一人一人違う」とおっしゃっていましたが、宮城さんから久保田さんに聞いてみたいことなどありますか。

宮城 私たちの当たり前を揺さぶってくれて、すごくおもしろいですね。重度の障害を持っている人たちが、街中のパブリックスペースでいろんな活動してるって、すごくおもしろいし、わくわくしますが、同時に、ネガティブな反応もあるんだろうなと思います。それをどう乗り越えたり、ひっくり返したりしてきているのでしょうか。

久保田 ちまた公民館にはうちの福祉施設利用者さん以外でも、発達障害がある方や、ちょっとうつで休職し



ている方等、居場所がない方も多く来ます。ここでは、そういう方々が出会い直して、新しいつながりをつくっていく所でもあると、ご近所さんに回覧板やあいさつ等で伝えているので、基本的にネガティブなことを言われたことはないんです。

おもしろいのが、私たちの運営する3つの拠点の内のひとつで、中心部から20分ぐらい車で行った郊外にある福祉施設のほうが苦情などすごく言われます。元々街は多様な人が集まる場所だから、みんなほっといてくれるというのが、2018年に街中に来てすごく良かったことです。そのあたりで、街のポテンシャルを感じています。

宮城 多様な人に出会っていると、受け入れる態勢がどんどんできてくると思うんですね。アートがあるといいなと思っているのは、そういう感覚をどんどん広げてくれる気がするからです。社会を寛容にさせてくれるという期待はあります。

北本 ありがとうございます。ここで、ご来場の皆さまにマイクを回してみようと思います。

A 地域のまちづくり協議会の会長をやっています。牧野先生から益田市の語り場のお話がありましたが、始めにテーマなど投げ掛けているのですか。

牧野 基本は、大人が自分の人生をしゃべることから始めます。「俺はこんなに成功したんだ」と偉そうにではなく、いかに失敗し続けたかってことを語る。そうすると、子どもは、ちゃんと自分のことを受け止めて、あえて恥ずかしい面を見せてくれたと感じたり、失敗を逆に魅力的だと思ったりして、相互に認め、尊重しあう関係

に入っていくんですね。そうすると、子どもは自分のこと、悩みを言い始める。初対面だから言いやすいつてことってありますよね。そのやりとりができる関係に入れるように配慮をしますし、実は、やる側が事前に少し研修を受けたりしています。

A ありがとうございます。私も失敗談は豊富にありますんで（笑）

北本 ありがとうございます。他に、いらっしゃいますか。

B ありがとうございます。しがらみを小さくしていくいい方法あれば、教えてくださいませんか。

北本 いい方法聞きたいですよ。お願いします。

宮城 私は、“頑張らない” っていうことを結構言っています。実際は頑張っているんですけど、頑張らないをテーマにいろいろやっています。というのは、地域を良くしたいって思うと皆さん頑張るじゃないですか。ただ、

頑張っていると、人にも頑張りを求めてしまったり、見返りを求めなくなったり、同じような頑張りを強要したりとかしちゃうことがあるんですね。自分が頑張ってるって思えば思うほど、言葉で言わなくても、そういうオーラが出てしまうんです。そうすると、そこに関わるとやらなければならないという思いになってしまって、そこがしがらみになってくると思うので、できない人がいても“しょうがないね” とどれだけ受け入れられるかなんです。その状況をつくっていくことが、しがらみを薄くしていくことかなと思っています。

そうすると、強いつながりができないんじゃないかって思われるかもしれないですけど、強くなくていいんです。強いつながりがあって、そこでちょっとへまをしたら、そのコミュニティにしばらく気持ちになってしまう。そうすると孤立しちゃうんです。小さい、薄い、緩いつな



がりが多層にあったら、ここが駄目だったらあっちに行けばいいというように行き来できる、1人の人がいろいろなコミュニティに属しているという状態がいいかなと思ってます。頑張り過ぎると折れちゃうので、自分のためにも頑張らないほうがいいと思ってます。だから、今やるべきことではなくて、その先にあるもの、目指しているもの、素晴らしい楽しい世界のために、頑張らないけど諦めないということを意識するといいかなと思っています。

北本 ありがとうございます。今度は、私から牧野先生に質問させてください。人と人が出会ってコミュニティが作られる中で、誰かに会おうというのは、自分が知らなかったことに気付くということではないかなと、お話を聞いて改めて思いました。でも、それと同時に、知らなかったことや違いに気付いた瞬間に、バツの悪

さを感じたりするとも思います。そのあたりについても少し教えていただけますでしょうか。

牧野 そういうことありますね。例えば、これだけ個性が大事だと言われているのに、個性を出さないほうがいいと思ってしまう。もうちょっと言うと、これだけ違いを認めなさいと言っているのに、違っていると途端に、上下の関係にしようとするところがあるんじゃないかなと思います。これは、学校教育のシステムがそうなっているに関係していると言われるのですが、もうちょっと違うだろうと思うんですね。例えば、小さい子どもたちが知らないことに会った時に、特に好奇心だらけの子たちは、これやってみたい、手を出してみたいと思って、どんどん行くわけですね。知的障害を持ってる方々もそういうところが多かったりします。そういう反応は、ある意味では、この社会から見ると異質な

のです。この社会は、みんなが本来持っているものを、社会化という名前で均質化して、秩序化するように働くという面があります。しかし、今それがうまく機能しなくなっているので行き詰まっているところがある。そうであれば、おもしろいと思ったら、「いいよ」って言ってくれるような環境を意識してつくることも必要ではないかと思います。

海洋生物学者のレイチェル・カーソンが、DDTという農薬の恐ろしさを書いた『沈黙の春』という著書の中で、「センス・オブ・ワンダー」という言葉を使っています。直訳すれば、「驚く感覚(感性)」ですが、子どもたちはみんなセンス・オブ・ワンダーを持っているけど、大人がそれを押しつぶしてしまっ、お金もうけすることがいいことなんだとか、1つの価値観で生きることがいいことなんだとしてきた結果、我々は自然を破壊し、人間だけが生き残ると思っていたら、実は人間もう駄目になってきてるんじゃないかということを言っています。彼女は、「センス・オブ・ワンダー」はほうっておいたら駄目なのだと言うのです。子どもたちが“これおもしろい”とが“びっくりしてもっとやりたい”と思ったら、“私が支えてあげてるからね”という大人の関係が必要なのだと述べています。ちゃんと認めていくことが大事なんだということです。

それは今、私たちが求められていることでもあって、評価する前に、ちゃんと受け止めて“認めてるよ”、“どんな子だって、私たちは離さないよ”と言ってくれるような関係があることが大事ではないかと思います。そういうことがどこかに行っちゃっている。



すみません、長くなっちゃいますが、もうちょっと言
うと、“他人に迷惑をかけない”という言い方をよくし
ますよね。それは関係を切る言葉なのです。インドの
格言で、“あなたは人に迷惑をかけて生きているのだから、人のことも許してあげなさい”という言葉があります。日本語で言えば＜お互いさま＞ということです。そういう関係を私たちは生きているのだから、“お互いさまで大丈夫だよ”と言い合えばいいんじゃないですか。そこを“他人に迷惑をかけちゃいけません”という教育をすることによって、実は、孤立することを強いてきてしまっているのではないかととも言われます。

それは、学校で競争して打ち勝つことにつながっていくかもしれませんが、今や打ち勝つこと、同じ方向を向いて競争していく社会でもないはずですよね。もうちょっと言えば、だからこそ今の社会は行き詰まっているのであって、お互い認め合う関係をつくりながら、新しい価値をつくり続けていく関係に入っていけないと駄目なのに、いまだに1つの価値観の方向を向けて競争させようとしてるってことですよね。

さっき私は、アートは価値観を壊しながら生活に結び付いていくと言いましたが、本来私たちの生活ってそういうふうにできているはずなんですね。だから、つながりを＜つくる＞ではなくて、＜元から＞つながっちゃっているのです。それを見えないようにしてきてしまったので、発見し直したらどうですかという話ですし、だからアートなのだと思うんですね。

北本 ありがとうございます。そのとおりでありたいなと思います。最後に、野嶋さんが「みんなが笑顔のまち

づくり」とおっしゃっていましたが、ご自身が笑顔になったエピソードを、教えていただけますか。

野嶋 若者ボランティアの「コミュニティ・アシスタント」という、最初は4人ぐらいで始まった登録制のボランティア制度があります。

そこに参加している中学2年生まで不登校だったという男の子がいるのですが、彼は中学3年生の時にうちにボランティアに来た時に「ボランティアっていいな、人とつながるのいいな」と感じて、中学卒業と同時に登録して、高校3年間一生懸命ボランティアを頑張ってくれました。その彼が、ついこの間なんですけど、湖西市のとある有名な会社に入れて、“このボランティア

活動を通じていろいろな人と知り合えたことも大きなきっかけだし、やっぱり人は一人で生きられない。みんなに支えられながら生きている。地域にこれから恩返ししていきたい”なんて言われて、ちょっと感動しちゃったみたいなことがありました。この協働センター、公民館の事業というのは、人づくり、人材育成がやっぱり一番重要じゃないかなと思いました。

北本 本当にそうですね。ありがとうございます。まだまだ続けたいところですが、今日のところはここで終了とさせていただこうと思います。ご来場のみなさま、ゲストのみなさま、ありがとうございました。



創造 トークス

2023.11.7 (火)

に

「コミュニティ」を考えた

発行：アーツカウンシルしずおか
(公益財団法人静岡県文化財団)
422-8019 静岡県静岡市駿河区 2- 3- 1
グランシップ1F
TEL : 054-204-0059
FAX : 054-288-8180
E-MAIL : info@artscouncil-shizuoka.jp
WEB : artscouncil-shizuoka.jp

発行日：2024 年 3 月

編集：アーツカウンシルしずおか

執筆：p.5 ～ p.24 神尾知里

デザイン：桑田亜由子